

「無抵抗と抵抗」

(一九七一年十一月三日矢内原先生記念講演要旨、草稿)

藤澤武義

一、無抵抗

「『目には目を、歯には歯を』と言われたことを君方は聞いた。しかしわたしは諸君に言う、『わる者に反抗するな、むしろ誰かが君の右頬を打ったら左のも向けよ。また君の下着を取ろうとする者には上着も与えよ。誰かが君に一ミリオン(二キロ半)強いるなら、彼と一緒に二ミリオン行け。求める者に与えよ。君から借りようとする者を追い返すな』(試訳)

(マタイ伝五・38〜42。参照ルカ六2930と前後)

これは主イエスの有名な、いわゆる無抵抗の聖訓であります。単なる教でなく、誠命であり、命令であります。主イエスはこれを与えただけでなく、御自らかく実行せられました。例えば弟子の頭でありながら度々信仰的失敗し、特に主を否む罪を犯した。ペテロに対し、また十二弟子の一人イスカリオテのユダが反逆したのに対し、殊に祭司長・長老・パリサイ人らが御自身を十字架上に殺したのに対し、小羊の如く全く無抵抗でした。

そこで私たちもこれを実行せねばならぬ、真に主に在りて実行することができる。しかし言うは易く行うは難しです。これに限らず、後の愛敵や六章の宝を天に積めの聖訓、七章一二の黄金律、広く山上垂訓全体、地上で肉体生活中は実行

できない。故にこれは天国の道徳で、天国では行えるが、地上では行えず、故に行わなくても可との説きもある。

なぜ行えないか、少し考えてみたい。先ずそれは心情・自然性の問題です。人から悪口されると、腹が立ち、言い返したくなる。人から打たれると、打ち返したくなる。すなわち私たちの情性には復讐心があるのです。その点、私たち自身「目には目を、歯には歯を」の思情や性質を持っているのです。

この言葉はかく復讐の意味にとられ易く、主の時代にも、その意味で用いられた場合もあった。しかしこの言葉は本来そういう意味のものではないのです。それは出エジプト記二一章二四(尚その前後、レビ記二四20、広く17-22、申命記一九21参照)からの引用です。これらは加害犯人を裁判で裁く場合の法規、すなわち犯人が被害者に加えたのと同じ傷を裁判官が犯人に与えるべき規定であつて、個人的復讐を許す律法ではなかつた。けれど被害者がその受けた損害を裁判官に訴え、それと同じ報復を要求するのを常とし、それが当然の如くに考えられていた。しかし右の如く旧約律法はそうではなかつたのです。そして主イエスはこれに一層高く且つ深い意味を加えて、この無抵抗の訓・命令を私たちに与え給うた。そこで私たちは言葉において、殊に行動において、復讐してはならず、この無抵抗を実行せねばならぬのです。

しかしわれらの自然性は復讐を欲する。その心情が自然に言動に現れる。その根本を考えると、何か損害を受けた時、不当な要求をされた時、相手に対する反感、憎悪がおこるのが人情、自然性である。表面上無抵抗の形をとつても、内心にそういう憎悪反感があるなら(顔や目に現れるもの)それ

は真の実行でなく、キリストの最も嫌い給う偽善というものです。かく真の実行は非常にむづかしい。

そこである人たちは考えます、これは絶対的のものでなく、ある場合、またある程度抵抗も正当と認められる（べきだ）と。十年余り前ある伝道者学者先生の山上垂訓その中のこの無抵抗の教を学んだことあり、その方曰く、ある場合にはこの無抵抗に反して暴力を使うのも止むを得ない（例えば弱い妻や少女、主にある姉妹等が暴漢に襲われるような場合彼女を守るために）と。少々驚きました。その方は南欧大学でも学んだ立派な学者なのに。また去る大戦中右翼や軍部は張紙などで、この無抵抗主義「右の頬を打たれたら左の頬も向けてよ」を交戦国に対して実行するなら、祖国は亡んでしまふ、このキリストの教えは誤りだと悪評しました。かく社会、国家の問題となると、この聖訓は一層実行困難であり、難解であります。友よ、いかに考解されるや。

キリストは道であり、真理であり給う（ヨハネ一四六）。主のこの無抵抗訓また真理です。それ故絶対的です。どんな場合どんな時にも実行すべきであり、そうせねばならぬ。かく実行した時、主、神の真の深いお守りや祝福あり、個人間にも国際間にも真の平和が実現するのです。

先の学者先生に対し（衆目を憚り）後日二、三回文通で論議し、拙説を是認し賛成して来られた、委細な点で私も譲歩した所もあったのですが。で右言の通り、どんな場合どんな時にも、個人も国家も民族も主に在りてこれを実行すべきです。

肉の情、肉の思いでは実行できない。要は主の十字架を仰ぐこと、肉の我はキリストと共に十字架につけられて死んで

しまひ、「キリストわが内に在り給う」によつて生きること（ガラテヤ二1920等）。その時われらも主に在りてこれを実行できるので。わが内に生き給う絶対無抵抗の主が成し給うから。

一九三七年八月矢内原先生は（後日お書きになったのによると、非戦平和主義で……していた不肖を応援下さるのが主目的だった由で）来陰され「国家の理想」題下でご講演の後、大山大で聖書講義をして下さいました。二日目ある教友召天で下山し葬送、翌日会場に帰ってみると誰も居られず、宿の都合で会場を変つて貰つた由、開催の全責任あり、違約だと責問し再考を促したけれど無効。先生にお詫び旁相談したら、無抵抗で受け流しておけばよい、と論されました。

個人の場合も国家の場合も原理は同じで、国家国民の指導者（更に相当多数の国民も）がこの信仰に堅立するなら、真の平和は必ず実現する。これが全人類の最大理想であり、最深の願望です。七十余年前チリ、アルゼンチン両国は国境紛争から戦争しかけたが、両国のキリスト者が呼応して立ち、主の十字架を仰ぎ、停戦、平和を達成しました。

近年ボンヘッフアーの研究、その著書また伝記、その紹介書等の読書盛ん。彼は天才的の神学者、戦前、殊に大戦中教会と神学を確立すべく努力した功績大きい由。但し賛成できない一事あり、ヒトラー暗殺計画に参加したことです。その気持は解らぬではない、彼の存在を消すことはドイツ国民のため周辺諸国や米国とユダヤ人広く人類の為と考えられる。しかし彼が悪魔同然の悪人でも、彼を殺すことは信仰的には大罪です。未信者と違い、信者がそれを企画し実行するのは誤り。言論において正義と平和を唱道し、それ以上は無抵抗、そし

て一切の審判を神に委ねるべきであった。彼は捕われ二年間獄中の後四五年春39才刑死、惜しいです。

なおこの無抵抗主義は病気や天災等人生の苦難や逆境等に対しても広く応用するのがよいと思う。例えば絶対不治の難病に罹ったような場合、十字架を仰いで己自身に死んでしまいい無抵抗で受けるなら、その重病が最早重荷でなく問題でないようになってしまい、その重病そのものに深大な恩恵が含まれていることを悟り、感謝、喜びを味わい、讚美を捧げ得るに至るのです（その実例無数）。

矢内原先生は三七年夏「国家の理想」が発端で右翼と当局の強腰、東大ことに同学部教授中にも御用学者が出たので、12月初め無抵抗で先手を打って辞表提出、退かれました。敗北の如く見えるが、否。先生の神的真理の言が彼らの内心を震撼させたのです。最も強いのは真理（コリントⅡ一三8）。

無抵抗は消極的で弱い（態度）敗北の如く見えようが、決してそうではない。イエスの十字架は最高最深、最大の無抵抗です。一見敗北のようだけれど、決して然らず。主イエスは弱いから十字架につけられたのではなく、強いから、本当は自らつぎ給うたのです。敗北でなく勝利。眼ある者は視よです。原理は主の場合も私たちの場合も同じです。

ヨハネ伝八章初段に姦淫の現行犯の女の物語あり、律法学者、パリサイ人等が来てこの女に投石すべく主を試みた時、主は長時無言、すなわち無抵抗。彼ら喧騒、後刻ただあの一語。それを聞くと彼らは良心に責められ皆退出した。また無抵抗の勝利、然り真理の勝利。神の真理に立つ時、無抵抗は最も強い。正義と平和に立脚し、またその為に、最も強いのはキリスト的無抵抗による非戦、無軍備なのです。

二、抵抗

しかし、いかなる場合にも、何ごとに対しても盲目的にこの無抵抗主義を貫くべきかというに、決してそうではありません。聖書にも所々、場合により、抵抗つまり戦うべきことを教え奨めてあります。例えばエペソ書六章一〇―一七

「終りに言う、主に在りてその強力の威力によつて強かれ。悪魔の奸計に抵抗し得る為に、神の全武具を着せよ。なぜなら我らの戦いは、諸支配と諸權威に対し、その暗黒の世の主権者、すなわち天にいる悪の霊に対するものだから。この故に悪しき日に抵抗し、すべてを征服して立ち得るために神の全武具を取れ。それ故真理で腰に帯をし正義の胸当てを着け、平和の福音の装備を足にはき、悪者のすべての火矢を消し得る信仰の長楯を常に取つて立て。また救の兜、聖霊の剣なる神の言葉を取れ」。（試訳）

有名な神の武具、それを持つて、靈的悪天に居る悪霊、悪魔サタンとの戦いを奨め命じたもの。サタンの誘惑や攻撃に對して、無抵抗ならすぐやられ、虜にされ、亡ぶようになる。故に私たちは神の武具を着装し手に取り、サタンに抵抗し、彼の全ての火矢を消さねばならぬ。「悪魔に立ちむかえ」（ヤコブ四7）との命令もあり、神の言命として信仰をもつて受け、御命令のまま、主に在りて主の大威力により、悪魔に立ち向かい、神の武具によつて戦い、必勝せねばなりません。人間ことに我ら信者の生涯は悪魔との戦いのそれで

あり、従つて不信なるこの世との戦いでありませぬ。主イエスは、この戦いをよく戦い（マタイ二三章等）そして大勝利を獲得されました（ヨハネ一六三三等）。我らも主に倣ふこと大切。

私たちの戦いを一般的具体的な相において分けますと、1 自分自身の肉、2 一般のこの世、との戦いであり、主に在りてこの肉と世に抵抗し（ヘブル一二四）勝利をかち取らねばなりません。

聖書中くり返し教え戒めてある通り、我らは先ず自分自身の肉および罪と日毎の戦いをせねばならず、肉と罪なる己を十字架につけ己に死んでしまひキリストわが内に生きたまうにより、聖霊によつて生きる者とされ（ガラテヤ二一九、二〇、二一以下。ロマ八一一七等）、神の子として勝利、主の栄光の器たる生涯に進まして頂かねばなりません。

聖書の肉という語は広い、又深い意味で使われており、その狭い意味の一つが肉欲・肉情であつて、これに関連する、またはこれを元とした巧妙また強い悪魔の誘惑また攻撃が内に外に必ず来るものであり、これは信者の命とりとなることあり、少しも油断できず、それに対し強く抵抗することが大切です。

それに関連のある貞操・性は実は命よりも貴いもの、女性のそれは殊に然りです。もし心なき男が女性に不品行の誘惑や更に暴行しようとするなら、断乎拒絶し、操を守るため力一杯防禦・抵抗する、殺されても操を守るべきです。家内の信友某夫人は（他の学友に比し世的不遇）病身の主人によく仕え戦後間もない頃農村に食料買いに行き、背負つて帰る時M市郊外で突然暴漢に襲われ、危い所、彼の急所を足げにし、ひ

るむ隙に走り帰られた由。この程度の抵抗・防力は許されるでしょう。

この世には不義と不真理・汚れが満ちており、古の預言者や日本でも内村先生、矢内原先生のようにそれらに対し私たちも抵抗し戦うべきです。

近世日本において矢内原先生ほどに神・キリスト・正義・真理・平和のため、世の不義不信、多くの邪悪、戦争勢力に抵抗し、それらと勇敢に戦つた人を知りませぬ。それらの詳細をここに述べる余裕ありませんが、一、二例証を挙げるなら、先生の抵抗の最は一九三七年九月号「中央公論」に発表された「国家の理想」だと思ひます。その内容は一種哲学的考察も加えつつ、イザヤ書を引用し神の真理を強調され、信仰の香り高く、全体に論旨整然、高格調。その理想は「正義と平和」そして国は正義と平和を目指して進むのが理想であり、最良最高だとの結論と思われる堂々たる原理的論文ですが、実は一番のねらい、真の目的は時局批判。預言、信仰的愛の忠告をこめられた抵抗であること明らかでしょう。

当時日本が日支事変を起して間もない頃、植民政策の権威なる先生は、同事変の前提を為す日本の朝鮮統治も満州征服も、正義と平和に反し悪魔的悪策をやつており（それを先生は早く看破）更に中国にまで魔手を伸ばし、不正不義と侵略（戦）を拡げつつあり、なお敢行するなら祖国と同胞に亡国の痛苦悲惨が必ず来る、ということと同論文中に暗示警告してあり、すなわちそういう預言なのです。

同年八月一七日夜米子商工会議所大広間で先生は同じ演題と内容（少し平易だったが）で講演された。それは不義・戦争勢力に対する抵抗、サタンとの激戦であつた。その時迄に

当局は求道誌を十回発売禁止処分していた。後日先生は九月号通信誌上にその時のご伝道旅行を掲げて述べ懐せられた。

「その本拠たる：市の公開講演会は私共の今後の行動の死命を決すべき二〇三高地である。：聴衆の背後に（靈的）敵の大軍が砲列を布いて居るのが見えて私は極度に緊張した。：神の真理の絶対性を論じた。：身をひそめ或は敵の頭上より爆撃を加へつつ戦った。：稀なる暑さだったし激戦の最高頂に達した時バケツで水をひつかぶされた様に頭から汗が湧き流れたが、拭くことも出来なかった。」

その上連続頭痛、寝食不足で大層お疲れになった。

中央公論のご論文は削除処分、以後当局は敵視し先生の名著「民族と平和」その他発禁、米子講演の後大山での聖書ご講義の中の時局批判、主戦主義に対する抵抗のご言説も当局が探知し問題とした。更に十月一日東京で藤井武記念のご講演が特に問題となり、迫害、十二月遂に東大追放となられた。

預言者は故郷・故国では尊ばれない。先生の主に在る愛国の至情による忠告を当局は拒み、次第に戦線拡大、遂に大東亜戦、太平洋戦。当時当局は国民外出時にはゲートルを巻くよう命じたが、先生は抵抗して巻かれなかった。しかも大阪の商人・大企業が戦争によつてぼろ儲けし、殊に軍部にけしかけて無理な大戦を強行させるに至つた由を知られた先生は大阪に行き、その不埒に対する批判、愛国の熱情ほとばしる講演をせられた。こうした先生の抵抗戦は他にも多く（戦後も）枚挙にいとまがない。世は先生の預言・愛の忠告に耳をかさず、その預言の通り神の審判降り、あの惨憺たる敗戦と

痛苦悲惨！もし世が預言者の声に耳を傾けていたなら、この事なかつたはず。戦後の諸事についても同断。

こういう抵抗は真に必要であり、且つ甚だ価値高く貴重である。そして神による、真理に立脚した抵抗は、一人の人によつて為されても国よりも、世よりも大きく強いのである。他の一例を見よう。

インドは実質的には百年以上イギリスの植民地として政治的経済的に種々苦しめられて来た。このインド独立に尽瘁した最大功労者がガンジー。第二次大戦を機として彼の指導のもと独立運動が一層盛んになり、英国は増々弾圧を加え、彼は度々投獄されたが不屈、無抵抗・非服従・非暴力・非協同主義により、言論と時に長期断食をもつて抵抗し、完全独立を要求し続けた。大英帝国も老ガンジー一人をどうにもできず、遂に四七年夏独立達成（同時にパキスタンも）。彼はクリスチャンではなかったが聖書を愛読し聖書によつて説教し、聖書の真理と正義に立脚して論じ行動した。真理と正義こそは最強の力なのである（コリントII一三三参照）。

ここに最も注意すべき最も重要なことは、神の真理と正義に立ち主に在りて言論によつてのみこの抵抗を為すべきこと。力・暴力を用いるなら平和を破壊する。それはサタンの途です。相手が悪者であっても暴力を使うべきではない。使えば逆効果で喧嘩、騒乱は一層大きくなる。個人間も大きい団体、国際間も原理は同じ。真理の道、平和の道、信仰の道、キリストの途は非暴力。「剣をとる者は剣によつて亡ぶ」（マタイ二六52）。剣とは暴力の意味でもある。暴力によつては真の解決、平和を齎らさない。かく抵抗は言論によつてのみ。

今や祖国は危機、問題山積、世界も。同胞は増々営利動物となりつつある。道徳ことに性道徳の頹廢と公害は広がり又深まるばかり、交通事故も類似。地域戦は止まず、軍拡競争も増すのみ。キリスト教界も大紊乱。行きつく所は滅亡。今や信者こそ主に在る至愛もて起とう。世と教界の不義不信墮落、その背後の罪、そして悪魔に対して神の真理と正義に立ち神の力もて強く抵抗、神の全武器により悪魔を征服せよ。

― 第二六七、二六八号（一九七二年六月、七月号）―